
mutation

ぱるひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

mutation

【Nコード】

N7356A

【作者名】

ばるひこ

【あらすじ】

‘ディオロム’それは特殊な力を持ちもつとも嫌われている人。・そのことを隠しながら生活している少年オルフ。しかし、ある事がきっかけでそれが周りにバレてしまう。オルフはそれによって迫害を受けることになる。果たしてオルフはどうなるのか！

scene 1・デイフォーム

「オルフ！いつまで寝ている！」
怒号が家中に響いた。

「う、うーん。あともう少しだけ・・・うわっ！」
ベッドから落とされた。

「痛つて〜何すんすか店長」

床にぶつけた後頭部を押さえながら恨めしそうに見上げた。店長の
ロツクがいた。

「ふざけるな！さっさと起きて店手伝え！」

拳骨をおもいつきり食らわせると部屋から出ていった。

「ったく。そんなに怒んなくても・・・」

「あんたが悪いんでしょ。ぶつぶつ言っでないで早く店手伝っで」
文句を言っでいるとおぼんを持った女が部屋に入っできた。

「なんだよ。勝手に人の部屋に入るなっで言っただろ、アリス」

ロツクの娘のアリスだ。美人だが性格は男勝りのこの店の看板娘だ。

「何言っでんの。元々はここ私の部屋よ。早く着替えて下りて来
よ」

文句を言っでさっさといっでしまった。

「まったく。口を閉じればかわいいのに」

ヒュッ。グサッ。おぼんが飛んできて頭に刺さった。アリスが顔を
だした。

「聞こえてるんだからね〜。変なこと言っでないで早く」
階段を下りて行く音がした。

「ぐ〜。あの親にしてあの子有りだな。両方猛獣並みに凶暴だ」

着替えて下に下りて行くと既に客が入っでいた。

「ようオルフ。やっと起きてきたか」

カウンターにいる客が声をかけてきた。

「いらっしやい。おっちゃん毎日来てよく飽きないな」

ゴスツ。脳天に衝撃が走った。

「バカッ。お客様に失礼な事言わないの！ごめんなさいハントさん」

またアリスのおぼん攻撃だ。起きてから一時間も経っていないのに
四回目の頭への攻撃。流石にまいるよ。

「クククッ。お前達のケンカと同じで毎日でもここの料理は飽きないんだよ」

オルフが苦虫を潰した様な表情をした。

「オルフ。早く働いてよ！」

まだ朝の八時だというのに結構客が入っている。・・・眠い・・・

一時間程して客の数が少なくなるとガラの悪い客が入ってきた。

タバコの灰落としやがって！

「いらっしやいませ。ご注文は？」

「Aセット二つ。でよー俺がでてったらビビりやがってさー。」

「かしこまりました」

またタバコの灰を床に落とした。

「まったく。ガラの悪い客だな」

ハントが言った。

「おっちゃんも十分ガラ悪いけどね・・・。Aセット二つ
通りすがりに呟いた。

「まったく、口の悪いガキだ」

「聞こえてたんだ」

オルフが苦笑いをした。

「オルフ持って行ってくれ」

ちようどよく注文が出来た。助かった。

「アリス、オルフ。ちょっと出てくるから店頼んだぞ」

「わかりました店長」

あゝ眠い。

「オルフ後ろ！」

欠伸をしているとハントが叫んだ。

「うわっ！」

後ろを振り向くと灰皿がものすごい速さで飛んできた。間一髪で避けることができた。

「何見てんだコラ！」

さっきのガラの悪い客だ。壁側の席に座っている中年のおばさんに叫んでいた。

頼むから朝っぱらから騒がないでくれよ。

「お客様。どうなさいましたか？」

なるべく怒りを静めようと満面の笑みで話しかけながら正面に立った。

「ナメてんじゃねえぞこのクソババア！俺様はなあディオフォームなんだよ！てめえごときすぐに殺せんだよ！」

ディオフォーム・・・その言葉を聞いた瞬間オルフの動きが止まった。

「邪魔なんだよクソガキどけ！」

突き飛ばされ、背中から床に倒れた。

「大丈夫オルフ！？お客様！やめて下さい！」

アリスが駆け寄って来た。

「うるせえ！じゃまだ！どけブス！」

「あっ！」

アリスが殴られた。

「アリス！・・・てんめえ！」

オルフが男に掴み掛かっていった。

「クソガキ殺されてえのか！俺様はデイフォロムだぞ！」
その言葉を聞くとオルフはうつむいた。

「・・・てめえみたいなのがいるから・・・」

小さく呟いた。それには怒りと憎しみが込められているようだった。

「何だとクソガキ！」

右頬を殴られた。

「・・・良いこと教えてやるよ・・・。本物のデイフォロムには左手に痣が有るんだよ」

オルフは顔を上げて男の左手を掴んだ。そこには痣はなかった。

「う、うそ言つてんじゃねえ！」

顔を真っ赤にして物凄い勢いで殴りかかってきた。拳がオルフの顔面に当たったと思った刹那、男の目の前から消えた。

オルフはいつの間にか背後に周りこんでいた。

「デイフォロムを語りやがって・・・てめえみてえな奴がいるから俺達は！俺達は！」

男の背中の中に思いつきり掌底を叩き込んだ。男はきれいに壁まで吹っ飛んでいった。

それを見て店の中に他の客の悲鳴が響いた。

「う、うわー！」

男と一緒にいたもう一人の男がイスから滑り落ちた。

「た、た、たすけて」

顔が真っ青になっていた。

「とつとと消え失せろ」

オルフが鬼の様な形相で睨み付けると、男は蛇に睨まれた蛙の様になって動かなくなった。

「早く消えろ！」

オルフが叫ぶと男ははじけた様に逃げていった。

「おい！そのカスも連れていけ」

戻ってきて伸びている男を背負って逃げた。

店の中がシーンとなった。

「あつ……」

しまった。やってしまった。

「バカオルフ！」

「ご、ごめんアリス……」

「何てことしてくれるの！ 食い逃げされちゃたでしょ！」

オルフがポカーンと口を開いたままアリスを見ていた。

「ウチみたいな小さな店じゃ二人に食い逃げされるだけでも大変なんだよ！ その分オルフの給料から引いとくからね！」

「そ、そんな〜」

ただでさえ給料安いのに……

「あ、あの……お会計お願いします……」

「こ、こっちも」

「私も……」

残っていた客がハント以外帰ってしまった。

「ごめん……」

「もういいよ。しょうがないよ。オルフは悪くないよ」

アリスが笑いながら言った。

「でも客……」

「おい。俺が残ってるだろ。しかたがねえよ、あの客どもはディフォロムを初めて見たんだろうよ。気にすることはねえ」

ハントが慰めの言葉をかけてきた。

「おっちゃん……」

「お父さんには私から言っておくから休んでいいよ」

「アリス……。顔……。大丈夫か？」

アリスの左頬には少し痣ができていた。

「これくらい平気平気！ 慣れてるから！」

頬をペチペチ叩きながら言った。

「そうか……。じゃあ休ませてもらうよ」

階段を上っていった。

「ねえハントさん。ディフォロムって何なの？」

「デIFOオロムか……。人と違う力を持ち、もっとも嫌われている人の呼び名つてところかな」

「嫌われ者……」

アリスが呟いた。

「さっきみたいに普通の人の何倍もの力を持っている人もいれば特殊な能力を持っている人もいる」

「何で嫌われ者なんですか？」

「さっきの奴みたいなことを一部の奴等がしていたからさ。それに便乗する奴も出てくる。さっきみたいに」

「そんな……。だからあんなに怒って……」

「俺も帰るよ。元気だせつて言つといて」

「ありがとうございます！」

scene 1・ディフォーム(後書き)

ジャンルが自分でもよく分かりません・・・

誰か教えて下さい！

とにかく皆さんに楽しんでいただける小説が作りたいです！

評価・コメントなんでもいいのでよろしく願います！！！！

scene 2・暴行

結局あの後はいつもの常連の客が来ただけだった。

「今日はもう店を閉めよう」

まだ七時だった。

「でもまだ二時間も残ってるんだよ」

「客が来ないと商売にならないだろう」

「でも！」

ロックが店の鍵を閉めてしまった。それを見て諦めたアリスが階段を上って行くと目の前にオルフがいた。

「ごめん・・・」

「別にオルフのせいじゃないよ！そうだ！気分転換に外行こうよ！
ねっいいでしょ！」

オルフがうつむいた。

「もう！しっかりしてよ。早く用意してね！」

アリスが自室に戻っていった。

「行って来い」

階段の下にロックがいた。優しい声で話しかけてきた。

「しっかりしろ！デイフォームだということに誇りを持って！お前の親父は誇りを持って隠していなかったぞ！・・・遊ばせてやるのは今日だけだぞ。明日からはしっかり働いてもらうからね！」

ロックが笑いながら戻っていった。

「すいませんでした！」

オルフは泣きながら謝った。

「オルフ遅い！この寒い中いつまで待たせる気！」
アリスが少し震えながら外で待っていた。

「悪い悪い。少し手間取った」

オルフの目が少し赤くなっていた。

「元気になったね」

アリスが笑った。

「心配かけたな」

「別に心配なんて！」

顔が赤くなっていた。

「俺はデIFOロムだということに誇りを持つことにした。もうそのことで泣かない。・・・また、迷惑かけるけど・・・」

オルフが申し訳なさそうな顔をした。

「迷惑なんていくらでもかけなさいよ。私はずっと味方だから」

そう言うと言いついて行ってしまった。

「ありがとう」

オルフも歩き始めた。

あれが例の？

そうみたい。怖いから町を歩かないで欲しいはほんと。いっそのことでつてくれたらいいのに

あちらこちらからそんな声が聞こえてきた。

「オルフ。気にすることないからね」

「大丈夫。それにやったのは事実だから」

ガツッ。

「痛ッ」

どこからか石が飛んできた。

出て行け！デIFOロムめ！疫病神め！

次々に物が投げ付けられた。アリスにも石が当たった。

「ちよつと！やめなさいよ！」

アリスが叫んだ。

「お前もデIFOロムの味方をするのか！」

老人が飛び出してきた。

「そいつらは疫病神だ！なぜこの町にいる！出て行け！」

「何で！オルフが何をしたの！」

「うるさい！今は何もしなくても必ず問題を起こす！」

「そんなこと・・・」

「もういいよアリス。帰ろう。ここにいるとアリスが怪我をする」

「でも！」

「いいから」

無理やり手を引っ張っていった。

出て行け！消え失せろ！疫病神！

次々と罵声が浴びせられた。

二人は店に戻らず別の建物の裏に隠れていた。

「ごめんなさい。私が外に行こうなんて言ったせいで泣いていた。」

「アリスが謝ることじゃないだろ。俺が悪いんだし・・・泣くなよ」

「オルフこれからどうするの？」

「わかんない。でも迷惑はかけたくない」

「出てかないでね・・・お願い・・・」

深刻そうな声で言った。

「大丈夫だから泣くなよ」。寒いしもう帰ろう」

二人が立ち上がった。

「この悪魔！」

後ろから角材を持った男が襲ってきた。

「くっ！」

右肩におもいつきり当たった。

「死ぬ！」

また振りかぶった。瞬間男の顎に肘を当てた。男がガクッと倒れた。

「アリス逃げる！」

「でも・・・」

「俺もすぐ行くから」

アリスがこちらを気にしながら走っていった。

「オルフ・・・」

ハントが後ろにいた。

「おっちゃん」

「早く逃げる！ここにいたら殺されるぞ！三つ先の都市にディフロムのための教会がある。そこに行け。この男のことはまかせろ」

「おっちゃんありがとう・・・」

「店長とアリスちゃんには俺から言っておく。早く行けよ！」

オルフが走った。

あれが例の？

そうみたい。怖いから町を歩かないで欲しいはほんと。いっそのことでてつてくれたらいいのに

あちらこちらからそんな声が聞こえてきた。

「オルフ。気にすることないからね」

「大丈夫。それにやったのは事実だから」

ガツッ。

「痛ッ」

どこからか石が飛んできた。

出て行け！ディフロムめ！疫病神め！

次々に物が投げ付けられた。アリスにも石が当たった。

「ちよっと！やめなさいよ！」

アリスが叫んだ。

「お前もディフロムの味方をするのか！」

老人が飛び出してきた。

「そいつらは疫病神だ！なぜこの町にいる！出て行け！」

「何で！オルフが何をしたの！」
「うるさい！今は何もしなくても必ず問題を起こす！」
「そんなこと・・・」
「もういいよアリス。帰ろう。ここにいるとアリスが怪我をする」
「でも！」
「いいから」
無理やり手を引っ張っていった。
出て行け！消え失せろ！疫病神！
次々と罵声が浴びせられた。

二人は店に戻らず別の建物の裏に隠れていた。
「ごめんなさい。私が外に行こうなんて言ったせいで泣いていた。」
「アリスが謝ることじゃないだろ。俺が悪いんだし・・・泣くなよ」
「オルフこれからどうするの？」
「わかんない。でも迷惑はかけたくない」
「出てかないでね・・・お願い・・・」
深刻そうな声で言った。
「大丈夫だから泣くなよ」。寒いしもう帰ろう」
二人が立ち上がった。
「この悪魔！」
後ろから角材を持った男が襲ってきた。
「くっ！」
右肩におもいっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7356a/>

mutation

2010年10月9日05時33分発行